

不安定雇用の女性研究者 —研究をめぐるジェンダー問題

真嶋麻子

本特集は、JSA 女性研究者・技術者委員会が立ち上げた調査チームにより実施された「不安定雇用の立場の女性研究者の実情に関する質的調査」に基づく各論からなっている。本誌2020年1月号に掲載された調査の中間報告からさらに分析が進み、不安定雇用の状態におかれた女性研究者の実情が明らかにされている。

本調査は、近年は様々に実施されている女性研究者研究活動支援事業に対する疑問と、不安定雇用の女性研究者が抱える実際の問題は何かという問いから出発している。女性研究者支援事業は女性研究者の何を支援しようとしてきたのか。そこではすべての女性研究者が対象となっていないのではないのか。不安定雇用の状態におかれた研究者に女性が多いのはなぜか。不安定雇用は女性研究者だけの問題ではないけれども、「女性である」ために不安が増しているとしたらそれはどういうことなのか。以上のような問題関心にもとづき、現在あるいは過去に不安定雇用を経験してきた女性研究者の協力のもと、2018年8月から2020年3月にかけて調査チームのメンバーが聞き取り調査を行い、具体的な状況や困難を明らかにすることを試みた。

構成は次のとおりである。本調査を貫く問題関心は、学界において女性研究者が置かれた位置を俯瞰した朴木の論考で一層鮮明になり、大竹論文によって本調査の方法と結果の概要とが

示される。そして、不安定雇用の形態のうち、大竹が任期付き雇用、衣川が非常勤講師の女性研究者の抱える問題を分析した。さらに、廣森は地方都市の女性研究者に固有の課題を、笹倉は研究環境の相違に影響をうけやすい理系の女性研究者のライフヒストリーをたどった。家庭生活において多大な女性研究者のワーク・ライフ・バランスを扱った斎藤の論考からも、現行の女性研究者支援の課題が浮き彫りにされている。また、日米の女性研究者を対比した鄭のコラムも掲載することができた。

それぞれの分析からみえてくるのは、「女性研究者」といってもその経験はそれぞれ異なるということである。とりわけ、不安定雇用におかれているか否かは極めて重要である。彼女たちからは、先の見えない不安のために、研究業績の蓄積や家庭生活に困難が生じていること、安定した雇用を得られている研究者と待遇において相違があり、つまり研究者間に分断と差別があることが語られた。不安定雇用を前提とした研究の世界に限界があるのは明らかで、その変革は性別を問わずすべての研究者にとって重要である。同時に、不安定雇用は女性研究者へ不均衡に負荷をかけていることを踏まえるならば、その困難こそ、研究をめぐるジェンダー問題の現われといえる。

(ましま・あさこ：日本大学、国際関係学)